

「役割語」研究と社会言語学の接点

金水 敏 (大阪大学)

1. 「役割語」の定義と本質

「役割語」という概念は、金水（2000）および金水（2003）でその概略と問題点が提出された。金水（2003）には次のような定義が掲げられている。

ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができる時、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。（金水 2003: 205）

即ち、役割語とは、人物像＝人物の「属性」（カテゴリ）と心理的に結びつけられたスピーチスタイルのことである。このような連合は、むしろ、個々の話者の心理的状态として記述できるが、重要なのは、そのような状態が言語共同体の中で共有されている場合であり、むしろそのような、社会的に共有された心理的連合をこそ、役割語の本質と捉えたい。またこの意味で、役割語は「ステレオタイプ」の言語的側面であるとも言える。

社会的に共有されているからこそ、役割語は言語を用いた表現（特にフィクション）に頻繁に利用される。またそのような表現を受容することにより、共同体の若い話者に、役割語の知識が伝えられることになる。これは、ステレオタイプの中でも特に「文化的ステレオタイプ」（Cf. Devine 1989, 上瀬 2002）と呼ばれるものの特徴を備えている。

役割語は、作品における表現において顕在し、また効果的に利用されて目立つので、表現論的あるいは文体論的に捉えられ易い。さらに、作品の表現を通じて新たなステレオタイプが生み出される場合もあるだろう。しかし、役割語の本質は、先に述べたように、共同体において潜在している連合の集合であり、作品における表現はその一面に過ぎない。役割語の知識は、フィクションのみならず、話者の日常的な会話にも影響を与える。

2. 役割語の属性面

上に見たように、役割語は、人の属性と結びついたスピーチスタイルであるから、役割語について考察する場

合は、属性面と言語面の双方からアプローチしなければならない。特に、対照研究を行う場合、言語面については対照言語学的考察が必要であることは言うまでもないが、属性の認知に関する対照社会学的視点もまた必要である。

日本語の役割語を例に、まず属性面について概観しておく。主たるグリッドを示しておこう。

- 年齢：幼児、少年・少女、青年、壮年、熟年、老年等
- 性別：女、男、男性的女性、女性的男性等
- 社会的階層・職業：下層・上層、知識人、芸術家、事務員、肉体労働者、農民、漁民、商売人、やくざ、学生、暴走族、体育会系等
- 地域性：都会人、田舎者（方言話者）、大阪人・関西人、九州人（博多者、鹿児島人等）、土佐人等
- 国籍・人種：外国人（西洋人）、中国人、黒人、「アメリカ・インディアン」等
- 時代：武士、江戸っ子、大名、公家、王様、お姫様等
- その他：宇宙人、ロボット等

むしろ、これで全ての属性が尽くされている訳ではなく、中間的・横断的属性をも考えれば、そのヴァリエーションは膨大である。また、文脈・状況に依存した、臨時的属性を導入する可能性もある。後述するように、定延（2006）では、話者の生理的・社会的属性とは独立に、個々の場面での話し方が指し示す属性を「発話キャラクター」と呼んでいる。例えば、若い男子学生であっても、時によっては知識人を“きどって”話す場合などに、「知識人の発話キャラクターを用いている」などと言うふう

3. 役割語の言語面

役割語の言語面は、当然、個別言語によって大きく異なる。日本語の場合、各役割語の特徴は、人称代名詞（特に1人称）および語尾の表現に現れやすい。例えば1人称代名詞には「わたし、わたくし、あたし、あたい、わて、わし、わい、あちき、あっし、おれ、おれさま、おら、おいら、ぼく、ぼくちゃん、うち、われ、拙者、それがし、まる、朕」等があり、それぞれにかなり明瞭な人物属性と結びついている。また語尾の表現としては、断定の助動詞（「だ、です、である、でございます、でござ

ざんす、でござす、でござんす、でやす、でやんす、でありんす、じゃ、や、でおます、だす、どす、にて候、なり」等)、終助詞(「わ、よ、ね、のう、ぜ、ぞ、わい」等)が特に重要である。その他、次のような要素が役割語の形成に関わり得る。まず、**語彙面**から挙げる。

- (狭義)敬語(尊敬語、謙讓語、丁寧・丁寧語)の使用・不使用、また敬語の段階。
- 美化語、雅語、卑語の使用・不使用:お～、ご～、めし、野郎、くそ、しょんべん、あほ、ばか、～ががる等
- 漢語、外来語の使用頻度
- (上項と関連するが)専門用語、業界用語、ジャゴン、略語等の使用・不使用
- 感動詞、笑い声、生理音等:あら、まあ、おい、こら、はい、はっ、うむ、おお、ははは、ほほほ、うふふ、ひっひっひ、きゃー、うっふん等

次に、**文法・語法的側面**を挙げる。

- 助詞の省略・非省略:「水がほしい」vs.「水φほしい」等。
- 言いさし表現の使用:「あたし……うれしくて……」等
- ピジン的特殊語法:「時間無いアル、早く払うヨロシ」等

次に、**音声的側面**を挙げる。

- 音便、母音融合、音素の脱落・挿入等:「分かんない」「知らねえ」「赤っ恥」「そりゃあそうだ」「行くのだ」vs.「行くんだ」等
- アクセント、イントネーション
- テンポ、雄弁さ
- 声質:咽頭のゆるみ、緊張等。Cf. 勅使河原(2006)「善玉1型・2型」「悪玉1型・2型」

最後に、**語用論、ディスコースの側面**。

- 命令形の使用・不使用:「やめろ」「やめてくれ」cf.「やめて」「やめてちょうだい」
- 講義的口調の有無
- 感嘆文の使用の多寡
- 話題の選択権 等々

語彙、語法・文法に関しては、言語差が大きく、役割語に関する日本語の特徴が非常によく出ていると言えるが、音声面、語用論・ディスコースの側面のある部分については、かなり言語普遍的な部分があるものと予測される。

4. コミュニケーションと役割語

山口(2006)では、フィクションにおいて、よく考えると不自然な役割語の使用も読者に受け入れられてしま

うのは、それが巨視的コミュニケーションの表現だからであると述べている。山口は、フィクションの中での登場人物同士のコミュニケーションを微視的コミュニケーション、作者から読者・受容者へのコミュニケーションを巨視的コミュニケーションと規定し、微視的コミュニケーションを通して、話者の属性が巨視的コミュニケーションとして読者・受容者に伝達される。山口は巨視的コミュニケーションの他の例として、状況説明やグルメ的な味の描写など、異常に詳しすぎる説明的なせりふを挙げながら、役割語もそれらと同様、巨視的コミュニケーションとしての機能を果たしているの で不自然さが目立たないのだとしている。

山口の言う巨視的コミュニケーションは、メタ・コミュニケーションと言い換えることもできる。メタ・コミュニケーションであるならば、フィクションに限らず、日常においても常に存在すると言ってよい。即ち、スピーチスタイルの選択によって、話し手の属性を聞き手を中心とする周囲の参加者に伝達する機能である。これは一般にコード・スイッチングやスタイル・スイッチングと呼ばれる現象と連続するもので、標準語と方言の切り替え、普通体と丁寧対の切り替えといった現象も、それによって話し手の属性が伝達されているとすれば、メタ・コミュニケーションの一部である。むろん、〈博士語〉のような“派手な”役割語が日常会話で選択されることは、遊びの要素が入った会話でなければ有り得ないが、男性の発話における「ぼく」と「おれ」の選択・切り替えなどを観察すると、日常会話におけるスタイルの選択や切り替えが、フィクションにおける役割語の選択と共通の知識を参照していることは明らかである。

加えて、日常会話における遊びの要素としての役割語の使用についても言及しておこう。親しい間柄での会話では、臨時的に〈博士語〉〈お嬢様語〉〈田舎者〉〈武家語〉といったさまざまな役割語類似のスタイルがパッチワーク的に用いられることがある。定延(2006)ではこういった現象を「発話キャラクター」という概念で説明している。これは、例えばマンガの中で、登場人物の頭身や衣装がコマごとにくらべて変わる現象とも似ていて、主に若い話者による、一種の会話の遊びと見ることができ。音声会話だけでなく、携帯メールのやりとりでも観察される。臨時的な方言的語彙・語法の使用や、「そうだプー」などなど「キャラ助詞」(定延2006)の使用も、こういった遊び的会話のなかでよく見られる。このような、会話における遊び的な役割語の適用は、会話の雰囲気や和ませ、(同調できる者にとっては)会話の参加者同士の一体感を醸し出す効果を持っている。

5. 言語イデオロギーと役割語

役割語が文化的ステレオタイプの一つである点で、容易に、規範として人々の言語使用や属性への評価に制約を与え得ることは言うまでもない。金水（2003）では、東北方言が黒人奴隷のことばとして翻訳に用いられること、ピジン日本語の一種である〈アルヨことば〉が中国人の表象として用いられることの問題について指摘した（金水 2006 も参照）。中村（2006）では、明治時代の「女学生ことば」の成立を例に挙げて、「女ことば」とは、女たちが実際に使ってきたことばづかいではなく、「女ことば」という抽象的な規範であるという考え方を提案している。中村（2006）によれば、「女学生ことば」の成立は、(1)性別化、(2)選択、(3)否定、(4)セクシュアリティ化の四つの過程に区別することができるとしている。それぞれ、つぎのような段階である。

1. 性別化—書生言葉の使用を否定することで学生を性別化する
2. 選択—「てよ・だわ言葉」と西洋語を女子学生の表象として選ぶ
3. 否定—「てよ・だわ言葉」を軽薄さの表象におとしめる
4. セクシュアリティ化—「てよ・だわ言葉」を性の表象にする。

さらに、この過程について中村は次のようにまとめている。

「女学生ことば」の創生は、当時の政治過程と密接な関係にあった。作家による「てよ・だわ言葉」の選択は、「女学生ことば」が正統な国語として認められる道を阻み、ジェンダー化された「男の国語」の創生を補強する。この意味で、「女学生ことば」の構築は、性別化された国民化を言語の側面からうながした政治的過程であった。（中村 2006: 134）

中村（2006）の主張には説得力があるが、さらにジェンダー・イデオロギーだけでなく、役割語一般の観点から、特定のスタイルが種々のイデオロギーと結びついていくダイナミズムについて確認していく必要がある。

6. さいごに

役割語は、言語はもちろんのこと、心理、社会、歴史、文学等さまざまな領域に広がる問題であり、広い観点からアプローチすることによって新たな展開が期待される研究領域である。役割語をキータームとして、さらに学際的なネットワークを広げていきたい。

参考文献

- 上瀬由美子. (2002). ステレオタイプの社会心理学: 偏見の解消に向けて. セレクション社会心理学, 21, サイエンス社
- 金水 敏. (2000). 役割語探求の提案. 佐藤喜代治(編)

国語史の新視点, 国語論究, 第8集 (Pp. 311-351). 明治書院

金水 敏. (2003). ヴァーチャル日本語 役割語の謎. 岩波書店.

金水 敏. (2006). 役割語としてのピジン日本語の歴史素描. 上田功・野田尚史(編) 言外と言内の交流分野: 小泉保博士傘寿記念論文集 (Pp. 163-177). 大学書林.

定延利之. (2006). キャラ助詞の生起環境. *KLS 26. Proceedings of the Thirtieth Anniversary Meeting, Jun4-5, 2005.* (Pp. 428-438).

勅使河原三保子. (2006). 声質から見た声のステレオタイプ: 役割語の音声的側面に関する一考察. *KLS 26. Proceedings of the Thirtieth Anniversary Meeting, Jun4-5, 2005* (Pp. 439-449).

中村桃子. (2006). 言語イデオロギーとしての「女ことば」: 明治期「女学生ことば」の成立. 日本語ジェンダー学会(編) 佐々木瑞枝(監修), 日本語とジェンダー (Pp. 121-138). ひつじ書房.

山口治彦. (2006). 役割語の個別性と普遍性: 日英の対照を通して. *KLS 26. Proceedings of the Thirtieth Anniversary Meeting, Jun4-5, 2005.* (Pp. 406-416).

Devine, P. G. (1989) "Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components." *Journal of Personality and Social Psychology*, 56: 5-18.

(金水が運営している、役割語研究に関するブログ)

「SKの役割語研究所」

<http://skinsui.cocolog-nifty.com/sklab/>

連絡先 金水 敏 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学大学院文学研究科 tel. 06-6850-5682

kinsui@let.osaka-u.ac.jp

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/>